

| | | | |
|---------|--------------------|---------|------|
| 氏名(本籍) | なか い だい すけ (東京都) | | |
| 学位の種類 | 博士(教育学) | | |
| 学位記番号 | 博甲第4730号 | | |
| 学位授与年月日 | 平成20年3月25日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | | |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 | | |
| 学位論文題目 | 生徒の教師に対する信頼感に関する研究 | | |
| 主査 | 筑波大学教授 | 博士(心理学) | 庄司一子 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 医学博士 | 小玉正博 |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 博士(文学) | 岡本智周 |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 博士(教育学) | 濱田博文 |

論文の内容の要旨

目的

近年、児童生徒の学校適応におけるさまざまな問題が浮上している。その中で教師-生徒関係における信頼感が生徒の学校適応、メンタルヘルス上重要であることが指摘されながら、十分検討されていなかった。本研究はこの「生徒の教師に対する信頼感」(以下、信頼感)について、教育学的・心理学的に検討すること、またそれは発達とともにどのように形成されるのか、教師とのどのような相互作用によるものなのかを質的、量的に検討することを目的とした。

方法

研究1は、信頼感の構成概念の検討、研究2では信頼感の構成概念の特徴、研究3では信頼感を規定する教師側の要因の検討、研究4では信頼感を規定する生徒側の要因の検討、研究5では信頼感の横断的・発達の検討、研究6では信頼感の質的検討を加えた。以上の目的をあきらかにするために研究1では中学生1995名を対象に質問紙調査を実施した。研究2では中学生1450名、研究3では中学生575名を対象に、研究4では中学生517名を対象に、研究5では中学生297名、高校生903名を対象に、質問紙調査を実施した。研究6では高校生575名を対象に質問紙調査、大学生15名を対象に面接調査を行った。

結果

研究1では、生徒の教師に対する信頼感の構成概念を検討するため、生徒の教師に対する信頼感尺度(以下STT尺度)を作成した。その結果、「STT尺度」は「安心感」「不信」「役割期待」の3因子構造であることが明らかになった。また、「STT尺度」の3つの下位尺度得点は学年・性別によって異なることが明らかになった。研究2は、生徒の教師に対する信頼感と生徒の学校場面における心理的要因との関連を検討した。その結果、生徒の教師に対する信頼感は、生徒の学校適応感、不登校傾向、教師との心理的距離といった生徒の学校場面の心理的要因と関連することが明らかになった。中でも、「安心感」は生徒の学校場面の心理的要因と密接に関連することが明らかになった。研究3は、生徒の教師に対する信頼感の規定要因を検討するため、教師側の要因である教師の指導行動・指導態度と生徒の教師に対する信頼感との関連を検討した。その結果、教師の勢力資源や教師のリーダーシップが生徒の信頼感に影響を及ぼすことが明らかになった。

また、教師への信頼・不信のきっかけに関する自由記述の分析から、具体的な教師の指導態度・指導行動が明らかになった。研究4は、徒の心理的要因と生徒の教師に対する信頼感の関連を検討した。その結果、両親への愛着、過去の対人経験、過去の教師との対人経験、教師スキーマ、といった生徒の個人的な心理的要因が生徒の教師に対する信頼感に影響を及ぼすことが明らかになった。研究5は生徒の教師に対する信頼感の発達の変化を検討するため、中学校から高校にわたる得点の変化を検討した。その結果「安心感」は中学1年生の得点が高く、その後は低い得点を維持し続けるが高校3年生のときに再び高まること、一方「不信」は中学1年生が最も低く、中学年が上がるにつれて増加し、高校入学後は一定状態を維持すること、「役割期待」は、中学1年生の得点が高く、その後有意に低下し高校1年生時に再び上昇するが、その後は再び低下する傾向が明らかになった。研究6は、生徒の教師に対する信頼感を質的調査によって検討した。まず、「STT尺度」の類型ごとに教師に対する信頼感についての自由記述を分析した。その結果、類型によって特徴が異なり、類型ごとに特徴的なイベントを教師との関係を経験していることが明らかになった。第2に、回想的に見た教師との信頼関係が生徒に与える長期的な影響を面接調査によって検討した。その結果、教師との信頼関係は生徒の人格形成や、その後の他者一般に対する対人関係にいたるまで影響を及ぼす可能性を有することが明らかになった。

考 察

本研究の結果から、これまで思弁的論考に留まっていた生徒の教師に対する信頼感の構成概念が実証的に明らかになった。生徒の教師に対する信頼感とは、生徒の学校適応や生徒の人格形成に影響を及ぼす概念であることが明らかになり、改めて生徒の教師に対する信頼感の重要性が示唆された。さらに生徒の教師に対する信頼感とは、生徒個人の心理的要因を背景に、現在、実際に生徒が接している教師の信頼性や教師との対人経験の影響を受けて変化することが明らかになった。これらの結果から、生徒の教師に対する信頼感には、教師の信頼性だけでなく、生徒の個人的な心理的要因も影響していることが明らかになった。そのため、教師-生徒関係は、現在の教師に対する生徒の認知といった、単なる個別的な二者関係だけではとらえられない可能性が示された。

以上、本研究の結果を総合的に踏まえると、生徒の教師に対する信頼感を高める働きかけとしては、これまで重点が置かれていた教師から生徒への直接的な働きかけに加え、それ以外の働きかけの可能性も含めて検討していく必要があると考えられる。そのため、本研究の結論として、教師-生徒関係における信頼感の構築について、(1) 信頼感を高める教師からの直接的な働きかけ、(2) 連携による働きかけの必要性、(3) STT尺度のアセスメントへの利用、の3つの観点から、教育実践に対する提言を行った。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、これまで教育において、重要とされてきた教師と生徒との関係について、「生徒の教師への信頼感」を論文の中心的課題として検討したものである。信頼感とは従来、心理学では性格特性に近い概念として「信頼感」が検討され、また教育学や学校教育の分野では、教師の行動を決定する教師特性としての「信頼性」が検討されてきた。これらは生徒が教師に対して抱く信頼感とは異なる概念であり、またこれに関する研究は行われていなかった。同時に近年の児童虐待の研究から子どもの成長発達過程における「重要な他者」(significant others)の重要性が指摘されるようになった。本論文で中井は、児童生徒にとって学校教育において出会う教師がこの「重要な他者」となり得ると考え、生徒の教師への信頼感の検討を通してこれを明らかにしようとした。信頼感尺度の作成により信頼感の構造が実証的に示され、生徒の信頼感を形成する教師側の要因、生徒側の要因が明らかになり、さらに中学生から高校生に至るまでの信頼感の発達を検討し、信頼感形成の契機や具体的な教師側の働きかけを質的に検討し、生徒の教師に対する信頼感が現在の生徒の

学校適応ばかりでなく、人格形成まで影響を及ぼすことを実証的に明らかにした。

本研究は、従来の信頼感の研究をさらに一歩進めたのみならず、学校教育における教師と生徒との関係がもたらす生徒への影響について新たな知見を示した研究として高く評価される。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。